

斑鳩の遠い夢

辻 憲男（文学部教授）

藤ノ木古墳が話題になった頃、聖徳太子に熱中したことがある。文献を集め、太子の足跡をたどった。夏の日盛りに、飢人伝説の片岡山や太子道、当麻～竹内～磯長谷（しながだに）などを歩いた。法隆寺の講座では、古代寺院が学問所であったことを教えられた。あの中門を入ると、右に金堂、左に五重塔、奥に大講堂、経蔵、鐘楼がある。回廊の外に食堂（じきどう）や僧房がある。大学でいう本館、教室、図書館、時計台、広場、食堂、寮などがそろっていたわけだ。

東院は太子の住んだ斑鳩宮の地＝写真。夢殿の救世観音（ぐぜかんのん）像は等身の秘仏で、スラリと背が高い。その奇妙な美しさはフェノロサによって突然発見された。和辻哲郎の『古寺巡礼』に引くところによると、フェノロサは「胸は押しつけられ、腹は幽かにつき出し、宝石あるいは薬箱を支えた両の手は力強く肉づけられている。しかし最も美しい形は頭部を横から見たところである。漢式の鋭い鼻、真っすぐな曇りなき顔、幾分大きい唇、その上に静かな神秘的な微笑が漂っている。ダ・ヴィンチのモナリザの微笑に似なくもない」と評した。しかし和辻はこれに同意せず、モナリザには「人類の暗黒」が宿り、観音には「瞑想から得られた自由」があると見た。

そう言えば、十七条憲法は第一に「和を以て貴しとなす」とあり、第二に「篤く三宝を敬え」とある。人の和を大切にした上で、信仰心を持つ。人世の理想である。いかんせん、太子その人にあこがれながら、迷妄の中の日々、この尊い思想を理解するにはいまだ至っていない。



聖徳太子は仏典の研究に没頭した。
不明の箇所は夢に金人があらわれて教えた。